

## 本との出会いを楽しむ 第8回

### 心に響いた言葉

白神自然環境研究所助教 山岸 洋貴



私は読書家というにはほど遠く、学生の頃からもっぱら専門書や図鑑などといった実用本ばかりを手にとってきました。これまで読んできた専門書は自分の研究分野に関わるものが多く、その中でも生物進化に関わるものは非常に面白いものばかりでした。学生の頃は、専門用語に文意がとれないことが多々あり苦労しましたが、いろいろと経験を積みあらためて読み直すと新たな発見に気づかされたりします。手軽に「そういえば・・・」と思い、すぐに本棚から取り出し再び読む事ができる本は、研究者として研究を進める上で無くてはならない存在の1つだと感じます。もちろん研究者としてではなくとも、私にとって本は大事な存在です。これまでの人生の中でもっとも共感でき、心に響いた言葉を教えてくれたのはとある小さなエッセイ集でした。その本で紹介された言葉は思い出す度に何度も私の心を豊かにしてくれますし、勇気づけられる事さえあるのです。

皆さんは星野道夫さんという写真家をご存じでしょうか。アラスカの動物を中心に撮り続け、生命力あふれる画角、透明感のある風景の写真集は有名で、ひょっとしたらどこかでその写真をみなさんも目にした事があるかもしれません。星野さんは、1996年、取材先のカムチャッカで熊に襲われて亡くなってしまったのですが、生前、アラスカの自然や原住民の暮らしについて書かれたエッセイ集や紀行文をいくつか残されています。その中の1冊「旅をする木」の「もう1つの時間」というエッセイに以下のような素敵な言葉がありました。

以下抜粋

ある夜アラスカの氷河の上で、友人と今にも降ってきてそうな星の下で話をしている。

「いつか、ある人にこんなことを聞かれたことがあるんだ。例えば、こんな星空や泣けてくるような夕陽を一人で見ていたとするだろう。もし愛する人がいたら、その美しさやその時の気持ちをどんなふうに伝えるか?って」

「写真を撮るか、もし絵が上手かったらキャンパスに描いて見せるか、いややっぱり言葉で伝えたらいいのかな。」

「その人はこう言ったんだ。自分が変わってゆくことだって・・・ その夕陽を見て、感動して、自分が変わってゆくことだと思うって」

以上

私にとって、この言葉は衝撃でした。この言葉は、人間の生き方すら教えてくれるような深い言葉に感じました。何か心から物事を伝えたい時、あるいは何か行動する時、他の何かに頼るのではなく自分自身を高め、変えていく必要がある。そんな言葉として私の胸に深く刻まれています。

「旅をする木」のほか、「長い旅の途中」、「ノーザンライツ」などといった星野さんのエッセイ集や紀行文の中には、この他にも素敵な言葉達がたくさんありました。また写真集さながらの美しい写真も添えられているので、一休みに眺めるのも非常に楽しいです。

(やまぎし ひろき)